
真・ゼロの使い魔～醜き少女ルイズと平賀才人～

悠水碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・ゼロの使い魔〜醜き少女ルイズと平賀才人〜

【Nコード】

N2705V

【作者名】

悠水碧

【あらすじ】

平賀才人はある日、ルイズという少女に召喚される。彼女は最低最悪の人間で学院中からの嫌われ者であった。彼女は契約という名の呪いで平賀才人を奴隷の如く縛りつけ、毎日のように惨い目に遭わせるのであった。これはアンチやヘイトではなく、原作のルイズを忠実に再現した結果、こうなってしまったものです。ご了承下さい。

prologue

俺の名は平賀才人。

何処にでもいる普通の高校生。

……だった。

「アンタは今日から私の使い魔よ!」

そう、あの日までは……。

「このっ、犬っ!!」

「ぐわああああ!!」

乗馬用の鞭で叩かれた俺の皮膚が裂け、血飛沫が飛び散った。
それを顔に受けるなり、目の前の醜女は更に顔を歪ませる。

「このっ……アタシの顔に……許さない!!」

そう言つて、再び乗馬用の鞭を振るつた。
鞭の先が偶然、俺の右目へと襲い掛かる。

「ああああああ!!」

俺の右目が失明したのは一瞬の出来事であった。
押さえた右手から、ポタポタと血が落ちていく。
それを見るなり、醜女はケタケタと笑っていた。

「このルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエー
ルの顔に平民の汚い血を浴びせかけた罰よ。いい気味じゃない」
「うっ……」

俺は思わず泣いていた。
涙が止め処なく溢れてくる。

それでも、俺はこの醜女……いや、ルイズを憎むことが出来な
かった。

この左手に光るルーンの力によって。

そもそも、何で俺がこんな目に遭っているのか？

理由は単純。

俺が厨房で、シエスタと話したから。
それだけである。

それだけなのに、このルイズとかいう醜女の権化は俺の右目を奪
ったのだ。

ふざけるな……。

ふざけるなっ！！

今すぐ、こいつを殺してやりたい。

そう思おうとすればするほど、俺の左手は輝きを増し、俺の頭は

無理矢理この醜女を好きにさせようとしている。

嫌だ!!

嫌だ!!!!

俺は、こんな女好きじゃない!!

だが、俺の心の自由は使い魔の契約とかいう糞みたいなもので、
徐々に奪われていくのであった。

「……フン、今日はこのくらいにしておいてあげるわ」

ようやく俺を痛めつけることに飽きると、ルイズは俺へ背を向けた。

「……次にアタシ以外の他の女と話なんかしたら、その左目も無くなると思いなさい。それとも、そのお喋りな舌を引っこ抜いてあげようかしら?」

そう言って、笑いながらベッドの方へと歩いて行った。

クソ……。

俺が何をしたって言うんだ?

いきなり鏡に吸い込まれたと思ったら、無理矢理唇を奪われ、その上使い魔なんていう奴隷みたいな契約まで交わされて……。

それで、今はこんな惨い目にまで遭わされて……。

それでも、こいつを憎むことさえ出来ないなんて……。

俺は舌を嚙んで死のうと思った。

だが、それさえもこの左手のルーンは許してくれないらしい。

そう、俺はあの日から人間としての全てをこの醜女に奪われてしまったのだ。

episode 1

「アンタ誰？」

目が覚めた時、一番最初に俺の耳へ飛び込んできた言葉はそれであつた。

とりあえず辺りを見回してみると、そこは先程まで俺がいたビル街ではなく、まるでRPGにでも出て来そうな建物と魔法使いのよな格好をした集団が視界へ飛び込んでくる。

どうやら俺は囲まれているようであつた。

混乱する頭の中を必死に整理していると、再び先程の声が聞こえてくる。

「ちょっとアンタ、聞いてんの!？」

先程よりも苛立ちと憎悪の入り混じった声。

目を向けると、割とすぐ側に桃色の髪の少女が立っていた。

顔立ちは悪くないのであるうが、何処か偉ぶった感じと苛立ちに歪んでいるからか、どうにも不細工にしか見えない。

俺が何を言おうか迷っていると、背後から違う声が飛んできた。

「ゼロのルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうすんだよ？」

その声に、目の前の少女は更に醜く顔を歪ませている。

どうやら、ゼロのルイズというのはこの少女のことらしい。

「ちょっと間違えただけよ!!!」

彼女は、先程の声に対して抱えるように返す。
まるで逆ギレした子供のようである。

「間違いつて、ルイズはいつもそうじゃん」
「流石はゼロのルイズだな！」

しかし、再び言い返されると、最後の一言の後に他の連中が次々と笑い始めた。
彼らの言葉と笑い声に、彼女は顔を真っ赤にしてブルブル震えている。

何となくだがいい気はしなかったので、俺は目の前のルイズという少女に少し同情していた。

ルイズはこちらに音が聞こえるぐらい激しく齒軋りをした後、一人の中年の男へ向き直り、ずかずかと歩いて行った。
そして、食って掛かるように言った。

「ミスタ・コルベール！もう一回召喚させてください！」
「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」
「何ですか！？」

ルイズは半ばヒステリー気味に叫ぶ。
コルベールと呼ばれた中年の男はそんな彼女を宥めるように、落ち着いた口調で話した。

「決まりだよ。二年生に進級する際、君たちは『使い魔』を召喚する。今、やっているとおりで」

そうして、何やら二人は話し合いをしていた。
その内容は上手く聞き取れなかったが、ルイズは渋々納得したの

か、不遜な表情でこちらへ向かってきた。

そして、俺の顔をまじまじと見つめながら一言ポツリと呟いた。

「……こんな、平民を使い魔にしなきゃならないなんて」

意味はよく分らないが、侮辱されたということは何となく分かった。

俺が抗議の為、口を開こうとすると、それをルイズの唇が塞ぐ。どうやら、キスをされたらしい。

生涯初めてのキスであるが、嬉しさも何もない。

寧ろ、不快感で吐き気すら込み上げてきた。

誰が、自分を蔑むような奴のキスを有難がるというのか。

俺はそんな変態的嗜好は持ち合わせてはいない。

いたってノーマルである。

だが、ことはそれだけで終わらなかった。

ルイズの唇が離れた瞬間、俺の左手はまるで焼き鏝を押し付けられたような熱と痛みを感じて、思わず呻き声を上げた。

「ぐっ!？」

「フン、ルーンが刻まれる位で何悲鳴上げてんのよ、情けない。すぐ終わるから、そんなみつともない真似はよしなさい?」

他人事みたいに言っただけのけるルイズに俺はいたく嫌悪感を抱く。

この痛み、苦しみを味わったら、お前だって同じ反応をする筈だ。仮にそれを知らなくとも、目の前で苦しがる人間に掛ける言葉ではない。

どんな教育を受けて来たのだろうか。

痛みと熱は、確かにすぐに収まった。

だが、俺の怒りは収まらない。
何か言ってやろうとした瞬間、俺の怒りは急にスッと引いてしまった。

「えっ？」

思わずアホみたいな声を上げてしまった。

怒りが根底から消えたわけではなく、ルイズに対しての嫌悪感もあるにはあるのだが、それを表立って出すことが出来ないのだ。

自分にはこんな自制心は無い。

不思議に思っていると、俺の左手が急にガツと掴まれた。

何だと思って見ると、それはコルベールであった。

「ふむ、珍しいルーンですね」

そう言って、すぐにスケッチを始める。

俺も恐る恐る左手を見てみると、何か文字のようなものが刻まれているのが分かった。

文字は微妙にだが発光しており、ただの入れ墨ではないということが俺にも察せられた。

その後、この場は解散となったのか、連中は次々といなくなっていくた。

中には空を飛んだ者もいたが、俺はそんなことは正直どうでもいいと感じていた。

俺の身に何が起きたのか。

俺が知りたかったのは、ただそれだけであった。

「フン、アンタちょっと来なさい」

そんな俺の気も知らず、ルイズは高圧的な態度で俺を手招きした。仕方なく、俺が後をついていくと、その道中にルイズは何度も俺に対して文句や罵声を浴びせ掛けてきた。

当然、腹は立った。

だが、やはり俺の怒りは表立って噴出することはなく、俺はただ苛々しながらルイズについていくことしか出来なかった。

この時、俺はまだ知らなかった。

この左手に刻まれたものの正体。

そして、それが俺を地獄へと叩き落すということ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2705v/>

真・ゼロの使い魔～醜き少女ルイズと平賀才人～

2011年7月31日00時04分発行